

特集「江戸の色を素敵に探る」

Special Issue: A Reflective Exploration of the Colors of Edo

特集にあたって

Editor's Introduction

井澤 尚子
Shoko Isawa東京家政学院大学
Tokyo Kasei Gakuin University

現在放映されているNHK大河ドラマ『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』の人気もあり、今年(2025)は江戸の文化が改めて見直され注目を集めている。約260年にわたる江戸時代には、元禄文化、化政文化と呼ばれる市井に住む人々が担い手となる文化も花開いた。両者には100年ほどの年代差があり、その間に「粋(いき)」「野暮(やぼ)」などの江戸固有の美意識が出現した。

浮世絵は当時の娯楽やトレンドの情報源となり、庶民の生活に溶け込んでいった。あたかも、現在のSNSによる発信が老若男女を問わず、情報源として私たちの生活を席巻していることとも似通うものがある。これらのことから江戸のこの時代は、ポップカルチャーが謳歌した時代ともいえるであろう。

日本色彩学会関東支部では、2025年4月12日に『江戸の色を素敵に探る』と題したシンポジウムを開催した。橋本実千代氏、大和あすか氏、河上繁樹氏を演者に迎え、色名・錦絵・服飾の多角的視点から、人々の生活に根づいた「江戸の色彩」の研究成果を伺った。

今回の特集は“機が熟す”のコトバ通り、タイミングは今!ということで、4月のシンポジウムを受けて企画されたものである。演者の三氏には、短期間での依頼にも関わらずシンポジウムの内容にさらに知見を加え、専門の立場からご執筆いただいた。読み進めるほどに江戸の往時に引き込まれる、そんな錯覚さえ覚えるような内容となっている。本特集が、多くの方にとって、「江戸の色彩文化」についての理解と興味を深めるきっかけになればと願うばかりである。

では、以下に題目と執筆者および執筆内容を紹介する。

題目1:「江戸文化と色名」

執筆者: 橋本 実千代(株式会社日本教育クリエイト)
内 容: 二大悪所といわれた歌舞伎、遊廓を中心に、上方文化と江戸文化、武家文化と町人文化、「野暮」と「いき」などの文化や美意識が複層的に出現した江戸時代。本稿では、江戸時代を前・中・後期と俯

瞰して歌舞伎や遊廓における色彩表現の意味と機能にも目を向けながら、特徴的にみられた色名とその背景について解説する。

題目2:「錦絵に用いられた色材とその変遷について」
執筆者: 大和 あすか(国文学研究資料館)

内 容: 浮世絵版画に用いられた色材は、錦絵が誕生した明和2年から文明開化期に登場し「赤絵」と称される極彩色の錦絵に至るまでの間に、大きな変化を遂げている。本稿では、文献資料から読み取れる錦絵の色材について概観し、近年の科学的調査によって明らかとなった各種色材とその変遷について報告する。

題目3:「「いき」な小袖 -京風から江戸風へ-」

執筆者: 河上 繁樹(大阪学院大学)

内 容: 江戸時代には小袖が衣服の中心になり、さまざまな染織技法が発展した。染織の中心地は京都であり、17世紀後半には友禅染がはじまった。多彩な友禅染は京都の「はんなり」という美を代表するものとなった。そして流行も移りかわり、18世紀後半には京よりも江戸が流行をリードするようになった。江戸っ子の美意識「いき」を背景に小袖の様相も変化した。本稿では、京風から江戸風に移りかわる小袖について色彩や模様がどのように変化したのか、流行の様相を解説する。

なお本特集の執筆者の専門分野は、日本および世界の色名研究〈橋本氏〉、文化財科学〈大和氏〉、美術史(染織分野)および日本服飾史〈河上氏〉と多岐におよんでいる。『江戸の色を素敵に探る』というテーマのもと、専門を異にする執筆者に江戸の色彩文化についての特集をお願いできたことは、学際的にも意義深いと考える。このことは、前述のシンポジウムにおける総合討論(質疑応答)での活発な議論においても感じたことである。

最後に、本特集の企画の機会をいただきましたことと、ご多忙中ご執筆いただいた執筆者のみなさまに感謝の意を表したい。

特集「江戸の色を素敵に探る」

Special Issue: A Reflective Exploration of the Colors of Edo

江戸文化と色名

Edo Culture and Color Names

橋本 実千代

Michiyo Hashimoto

株式会社日本教育クリエイト

Nihonkyoikukurieito CO., LTD

キーワード：江戸文化、染色、吉原、歌舞伎、色名

Keywords : Edo culture, Textile dyeing, Yoshiwara, Kabuki, Color names

1. はじめに

江戸時代は、約 260 年にわたる政治的安定と経済的發展を背景に、武家政権のもとで町人文化が台頭し、都市生活に根ざした独自の美意識と娯楽文化が大きく花開いた時代である。とりわけ江戸の町では、身分制度のもとにありながらも、町人層による独自の美意識が育まれ、衣食住のあらゆる場面において「粋」や「洒落」といった価値観が色濃く反映された。その中で「色」は、単なる視覚的装飾にとどまらず、身分・教養・季節感・感情・風俗などを表現する重要な文化的記号として機能し、非言語的なコミュニケーション手段であった。本稿では、江戸時代を前期・中期・後期に分けて、遊郭や歌舞伎における色彩表現の意味と機能にも目を向けながら、特徴的にみられた色名とその背景をたどる。

2. 江戸前期(慶長8年～貞享4年/1603-1687年)

江戸幕府の成立とともに、政治の中心が京都・大坂から江戸へと移行する中で、文化的影響は依然として上方に依拠していた。桃山期からの黄金嗜好は継続され、狩野探幽らによる金地を用いた空間装飾的な作品は、本阿弥光悦や俵屋宗達(図1)に受け継がれ、江戸中期以降に活躍した尾形光琳や鈴木基一らによって少しずつ変化をしながら継承されていった。女性の衣裳に摺箔や縫箔といった技法による金色の装飾が好まれ、豪華な美意識が支配的であった。一方で、白と黒の対比的な色彩も流行した。白地の小袖は本来、公家・武家に限られていたが、やがて町人層にも波及し、清廉さや格式の象徴として人気を博した。陶磁器においては、柿右衛門による「濁手(にごしで)」の技術が確立され、乳白色の素地の美しさが高く評価された(図2)。



図1 俵屋宗達《月に秋草図屏風》
(17世紀・メトロポリタン美術館蔵)



図2 柿右衛門様式《色絵人鶴文六角型壺》
(17世紀・東京富士美術館蔵)

武士階級に好まれた憲法色(憲法染)は、広く町人からも人気を集めるようになり、江戸中期以降「粋(いき)」を代表する色となった。この時期幕府は度重なる奢侈禁止令を發布し、紅花染めによる紅色や紫根染めによる本紫など、高価な染料による色の着用を制限した。これにより、蘇芳で染めた甚三紅や、藍と茜を組み合わせた似紫といった代用色が流行し、制限の中で創意を凝らす江戸人の色彩感覚が育まれていった。

特集「江戸の色を素敵に探る」

Special Issue: A Reflective Exploration of the Colors of Edo

錦絵に用いられた色材とその変遷について

Changes in the Colorants Used in Nishiki-e Prints

大和 あすか
Asuka Yamato国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature

キーワード：錦絵, 色材, 非破壊分析

Keywords: Nishiki-e, Colorant, Non-destructive analysis

1. はじめに

浮世絵版画は、墨一色による単色摺りの墨摺絵に始まり、その後、顔料や染料由来の色材を用いて筆彩を加える丹絵や紅絵へと展開した。さらに、紅摺絵では3～4色程度の版本を用いた重ね摺りが行われるようになり、技術の発展とともに、彫りおよび摺りの革新が進んだことで、複数の版本を用いた高度な多色摺り技術が確立され、技術的・美的に洗練された錦絵が誕生するに至った。

錦絵は、日本絵画のように絵師が筆を執って一点一点描く作品とは異なり、一度に数百から数千部単位で生産された大量流通・大量消費の出版物である。したがって、錦絵に用いられた色材を含む技法材料の研究は、浮世絵研究の深化にとどまらず、近世日本における絵画材料の流通および普及の実態を明らかにする上でも重要な意義を有する。

本稿では、まず文献資料から読み取れる錦絵の色材について概観し、その後、近年の科学的調査によって明らかとなった色材とその変遷について報告する。

2. 文献にみる錦絵の色材

錦絵に用いられた色材には、無機顔料と染料を主体とする有機色材の双方が存在する。これらの材料や技法について詳細に記した文献としては、石井研堂著『錦絵の彫と摺』（芸艸堂、1929年）が広く知られており、現代に至るまで復刻版や新装版が出版されている。同書は、明治中期に刊行された木版技法書『日本製品図説』や『文芸類纂』の内容を引用しつつ、江戸時代から続く版元である広瀬菊雄（伊勢辰）や摺師への取材、そして研堂自身による彫摺の実践経験に基づいて、色材・紙・道具・制作技法等を網羅的に紹介している。とりわけ、第九章「摺法の一 乙 絵の具」では、次のような主要色材が列挙されている。

【黒色】墨：炭素（C）

【赤色】紅花：花卉より搾取・精製

朱：硫化水銀（HgS）

紅殻：酸化鉄（Fe₂O₃）丹：酸化鉛（Pb₃O₄）

【黄色】鬱金：根から抽出

雌黄（石黄）：硫化ヒ素（As₂S₃）

藤黄：熱帯植物の樹脂

棠梨：樹皮の煎出液

黄檗：樹皮より抽出

【青色】藍：葉から製出、藍蠟

藍紙（青花紙）：露草の汁で染めた紙

ペロ藍（プルシアンブルー）：フェロシアン化

鉄（Fe₄[Fe(CN)₆]₃）※使用開始期は不明で

あるが、天保年間（1830–44）以降と推測

【白色】胡粉：炭酸カルシウム（CaCO₃）

上記の記述は、錦絵に用いられた色材を網羅的に紹介しているように見えるが、研堂は明治期以降の錦絵を「俗悪低級の赤錦絵」と断じ、その技術や材料に関する記述を意図的に排除している。また、錦絵が誕生した18世紀半ばから終焉を迎える20世紀初頭までの約200年間には、制作技法および色材の面で多くの変遷があったと推測されるにもかかわらず、本書において時系列的な変化に言及されているのは、青色色材であるプルシアンブルーの導入に関する部分に限られている。

さらに、列挙された色材のすべてが実際に錦絵に使用されていたかどうかは明らかでなく、文献記述を参照する際には、それを無批判に受け入れるのではなく、科学的な手法によって実際の使用実態を調査し、記述内容の信憑性を慎重に検証する必要がある。

特集「江戸の色を素敵に探る」

Special Issue: A Reflective Exploration of the Colors of Edo

「いき」な小袖 —京風から江戸風へ—

"Iki" Kimono : From Kyoto style to Edo style

河上 繁樹

Shigeki Kawakami

大阪学院大学

Osaka Gakuin University

キーワード：友禅染, 光琳模様, 白あがり, 江戸褌, いき

Keywords : Yuzen dyeing, Korin-style design, Design reserved in white, Edozuma pattern, Iki

1. はじめに

江戸時代には小袖が衣服の主流となり, さまざまな染織技法が発展した。染織の中心地である京都では, 1680年代に友禅染がはじまった。多彩な友禅染は京都の「はんなり」という美を代表するものとなった。「はんなり」は「花なり」であり「華やか」に通じる。

やがて流行も移りかわり, 18世紀後半には京よりも江戸が流行をリードするようになった。江戸っ子の美意識「いき」を背景に小袖の様相も変化した。深川芸者が好んだ縞や小紋染, あるいは吉原へかよう通人の装いというところになろう。

18世紀半ばには, 京風から江戸風へとモードが移りかわり, 江戸が流行の発信地となった。本稿では, その移りかわりについて, 小袖を中心に流行の諸相をながめていく。

2. 京に流行る友禅染

京都で友禅染が流行りはじめるのは, 貞享(1684-1688)のころである。貞享3年(1686)に上梓された小袖雛形本『諸国御ひなかつた』の序文には, 「遊せん(友禅)ふう」の様子が流行っていると述べられ, 翌年に出版された『源氏ひなかつた』には「扇のみ

か小袖にもはやる友禅染」とみえる。知恩院の門前で扇屋を構えていた宮崎友禅斎の扇絵が評判となり, その絵を小袖の模様に染めたところ, 友禅染として流行したという。同書には友禅染の小袖図が掲載されている(図1)。その説明書きによると, 背中の「塩路」の文字を紫と浅葱の鹿の子にして,



図1 『源氏ひなかつた』
地うこん塩路のあみのもやう

裾の岩と網を友禅染で萌葱, 茶, 浅葱, 中色に染める。中色は浅葱よりも濃い中程度の青色をいう。

この配色に類した友禅染の産着が伝えられている。仙台藩の陰陽師をつとめた平野家に代々伝来し, 藩主の伊達綱村(1659-1719)から賜ったという産着である。全体を唐茶色に染め, 伊達家の定紋である仙台笹を付け, 上半身に海松に貝, 下半身に干し網の模様を友禅染であらわす。友禅染につかわれた絵の具の色は, 萌葱, 浅葱, 茶(黄色に赤味を加え, さらに墨を重ねた色)である。この産着には魔除けとして背中に男児用の雄針による糸じるしが縫われている。綱村の長男扇千代(1681年生まれ)所用の産着の可能性が高い¹⁾。わざわざ京都へ注文したものだろう。

男児の産着ゆえか友禅染に赤色が入らず, それほど華やいだ色合いではない。しかし, 享保17年(1732)の『万金産業袋』巻四「染帷子」の項目には「町風といふはゆふぜんもやうもあつさりとして生臘脂を色よく遣ひ」とあり, 生臘脂の赤色が友禅染に彩りを添えた。

友禅染ではどのような絵の具をつかったのだろうか。赤は生臘脂, 青は藍蠟, 黄は雌黄(藤黄)である。

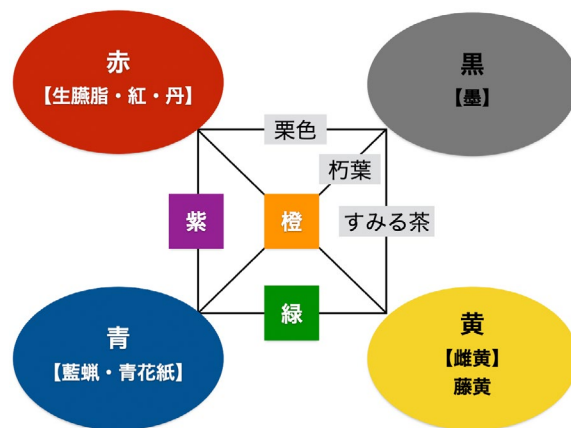


図2 友禅染の絵の具